

# 茶鬪の賭城

宇能鴻一郎



歴史小説  
選書 9

人物往来社

# 城賭けの鬪茶

宇能鴻一郎著

<著者略歴>

昭和9年北海道に生まる。東大国文学科卒業。国文学会、史学会員。「鯨神」にて第46回芥川賞受賞。他に「完全な女」「地獄鉢」「痺薬」などの作品がある。  
現住所=東京都港区芝白金今里町116芝白金団地3-502

歴史小説選書 ⑨

城賭けの鬨茶

昭和42年5月25日 初版発行

著 者      う の こういちろう  
            宇能鴻一郎  
発行者      八 谷 政 行  
発行所      株式 会社 人物往来社

東京都千代田区丸ノ内3ノ2新東京ビル  
電話 代表 (212) 3931 振替 東京101

定 価    390 円

---

印刷・凸版印刷      製本・熊倉製本  
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

目次

青年・素盞鳴尊

五

城賭けの闘茶

四七

六方者一代記

七五

葉人記

二七

閻浮の秋

一六一



# 城賭けの闘茶



## 青年・素戔鳴尊

### 一

戯れあう女たちの叫びが、沼の真昼の静寂<sup>しじま</sup>を破った。

満身を花で飾った斎塙<sup>えご</sup>果の老木が鈍光を放つ水面に影をのぼしている。白い花はまばらな雪のように落ち散って浮き、すると水底の枝は、ますます多くの花に装われるのである。真黒な鳩鳥がひとつ浮きあがり、不審げに岸を見やったが、たちまち羽ばたいて浮き巢に滑走した。あたりは再び静まる。池心の睡蓮<sup>ひつじき</sup>が一つ、音もなく開いた。

沼にそそぐ、澄んだ細流のなかでは、四、五人の全裸の女たちが転げまわっているのだった。みな豊かな乳房と腰をもち、乳首はまだ稚いものも、暗紫色の乳暈が顕著なものもいたが、顔つきは一樣に無邪気で、老若はほとんど区別できなかった。全身には銀いろの砂がくまなく付着し、

陽を浴びて輝くときは、密生した美しい生ぶ毛のようにも見えるのである。

一組の女は向き合つて座り、お互いの顔に唾を吐きかけ合う遊びに熱中している。うまく当たると、両方とも身を揉んで笑いころげるのである。

少し離れた河骨こうほねの群落のなかでは、また一組の女が金いろの花に囲まれて座ってお互いの髪の毛を取り合っている。虫が取れると、白い歯で噛みつぶして水に吐きすてるのである。女たちのあいだには、すべて平和で懶惰らんだな空氣がみなぎっていた。

ふいに、その空氣が硬くなった。女たちは、身じろぎもせず耳をすませ、あるいは兎のようにこまかく鼻翼を動かして匂いをかぎ、風上のほうから近づいてくる何かを確かめようと、一心になつてゐる様子である。一人が立ちあがつて、

「酋長きさみの稚子わうしが」と、つぶやいたのは、その氣配がいよいよ濃くなつてからのことだった。

すると、女たちのあいだには嵐がまき起こつた。目にもとまらぬ早さで、立ちあがる。岸から樹皮の布や、貝輪などの装身具を拾いあげる。沼のふちをまわつてたちまち姿を消してしまう。

あとには足跡と、砂に彫られた幾つかの臀のまだ温みがありそうな正確なかたちと、蹴立てられて濁つた水が残つてゐるだけである。

熊笹を押しひらき、河骨の艶やかな厚い葉をふみにじつて姿をあらわしたのは筋骨逞しい、大男の若者である。濃い眉根は不機嫌に寄せられ、その下に陰しい、大きな眼が光っている。太い

鼻梁も、厚い唇も、重そうな顎も、それらの造作をとりかこんで密生した髭も、若者の短気で、強情そうな性格をよく語っている。肩と胸に簡単な鉄の鎧をつけ、腹から下は裸で、陰茎に赤く彩色した太い竹筒の莢をはめているだけである。右手には短い弓をもち、みごとな角を持った雄鹿をかるがると担っていた。

「女たちだ」と、のちにスサノオと呼ばれることになった若者は低い声でつぶやいた。「たったいま、逃げおったのだ。誰も彼も、なぜこのようにおれを怖れるのだろう」

若者の顚顚は怒りに波うち、額の蒼筋は怒張して浮きあがった。珍しいことに若者の額には刺青も、粘土をすりこんで作る飾り傷も見られないのである。

「愚ものめ」と、スサノオは唸って砂を蹴った。沼のふちをまわり、蔓草の密生している密林にかけ入った。道はとだえがちで、黄緑色の花をつけた独活蔓や、黒い装果を隠した蓼葉や、寶石のような実を持った蛇葡萄やが、重なり合って行く手をはばんでいたが、若者の逞しい脚はさしてさまたげにも感じなかった。

森は緑いろの光しか透さず、空気の中というよりはむしろ水底のような感じだったが、女たちは、舌を出したり歯をむき出したりして、彼を注視している精霊たちとともにこの光りの激みの底にかくれて、怒り狂ったスサノオをやりすごそうとしているにちがいないと思われた。たちまち森を抜けると、目の下に部落がひろがる。ほとんど自生にちかい粟畑にかこまれて、二十五、

六軒の小屋が馬蹄形にならび、広場の中央に高床の穀物倉と一きわ大きい男たちの集会所がそびえ立っているのである。ほかの小屋がほとんど茅で葺かれていたのに、この二つだけは杉皮葺きで、屋根には千木、堅魚木<sup>かつおぎ</sup>までが載せてあり、見るからに重々しく見える。この二つの建物のあいだで、部落の重要な行事はほとんど催されるのである。

スサノオは、鹿を肩にかけたまま、ずかずかと広場に入っていた。戸口で寝ころんだり、木を削ったり、草の実を糸に通したりして装身具作りに熱中していた人々はさりげなく目をそらしたが、こうしたあしらいを受けることに、若者は慣れている。部落の誰もがこの乱暴者とかかりあいになることを避けているのだ。子供だけがうるさくつきまどってくるのに、若者は目もくれず、広場の奥の、茅葺きながらや大きい一軒のまえに進んだ。

父親の老酋長は、いくつかの親類部落の大首長<sup>きみ</sup>をも兼ねていたが、小屋の前で地に転がって陽を浴びているのだった。全身くまなく刺青でおおわれ、顔面と上膊には飾り傷がいく筋も、蛇のようにうねっている。白髪は地にはときはなち、身には何の装飾もつけず、わずかに陰莖莢の竹筒の透かし彫りだけが、首長の地位を示しているだけである。のみならず、大首長には相応しくない遊びにさっきから耽溺しているさまが、部落のどこからでも見てとられる。つまり二人の若い妻と、足先を中心にして放射状に寝ころび、ときどき足をあげては、おたがいの蹠<sup>あしうら</sup>を打ちあわせる遊びに、大首長は夢中になっていたのである。

父親は眼を開け、息子を見上げ、照れくさそうに起きあがった。二人の妻はそそくさと小屋の奥へ消えた。

「これはみごとな鹿だの」と、父親は急いでお世辞を言うのだった。「さっそく石を灼かせよう。一緒に焼く山椒と山芋を、女どもに取って来させねばな」

スサノオは鹿を地に投げ出すと、台所の方へ行こうとした父親の腕を強い力でとらえた。

「父よ。今日こそ話を聞いて下さい」

と若者はなお怒りを潜めた声で言ったのである。

「いつでも、私に会うと、逃げてばかりいられる。この村にいれば、私はいつまでも邪魔者です。掟は守らない。祖先の神々は馬鹿にする。祭は妨害する。水門を開いて、木を枯らす。部落の若者のなかで、私一人がまだ成年式も、刺青も受けていない状態です。皆がおとなしく受けている成年式や刺青が、私には厭なのだ。皆とおなじことをして皆とおなじ一生を送るのが、私は耐えられぬのだ。この村にいるかぎり、私はますます乱暴になり、憎まれ者になるでしょう。私が力が強く、首長の子だというので、誰も私を抑えようとしなだけなのです」

「お前を生んだ女の部族へ行くことはならん」と、老酋長はししぶと言った。

「子は、みな母の部落で育てられるのがふつうです」スサノオは激しく答えた。「現に私の姉は母の部落で育てられ母のあとをついで首長となっているではありませんか。男の子だけを父親の

部族に残すということも、昔はなかったことです。大したことではない。もうすぐ出発する、例年の交易隊に、私を加えて下さるだけでいいのです」

陽だまりのなかの二人の口論を、いつか女たちや子猿を背負った子供たちがひっそりと取りかこみはじめた。観衆を意識してか、首長は急に能弁になった。実に能弁は首長の第一の資格なのである。いつものように、習慣や、伝統や、伝説上の英雄の物語を滔々とのべたてたあげく、彼の出した結論はこうである。

「お前はここにいる。おとなしく成年式と刺青をうけ、妻をめとる。わしのあとをついで雉部落の大首長となる。祖先の神々から命じられた役割を守って、海の魚をとり、芋を作って、地上の生をおえればよいのだ。交易などは、首長の子のみずから行くことではない」

「しかし」と、若者は泡を吹きそうにしながら反論した。「私のような性格のものの運命は、昔からきまっていたはずです。傲慢で部落の習慣を守らず、突飛なことばかりをし、人の嫌われものになっている若者の運命は、村をはなれて交易隊に入り、遠くの部族をさすらいことだと、昔からきまっていたはずです。偉大な祖先であるイザナギの物語も、それを教えているではありませんか。年老いてふたたび村に帰って来たときはすっかり性格が変わり、よその部落で得た知識を生かして、部落で役に立つ人間になった例もたくさんあります。首長の子だからといって、同じことをしていけない、ということはないはずです」

「もうよいわ」と老首長はどうとう癪癪を起こして、腕を振りちぎりながら叫んだ。「勝手にさせ、だが、途中で危険に会っても、お前はこの村の神々の助けを求めることはできぬぞ。いつそのことお前の足が腐ればいい。この汚い、糞同然の、虫けらめ」

この罵倒は、しかし愛の反語と言うべきであった。密林と、部落のいたる所で耳をすましている、怪奇な形の嫉妬ぶかい悪霊たちもこう罵られた惨めな男には、もはや関心を払わぬであろう。反対に善き霊たちは、彼の惨めさを憐んで旅がつかないよう、無事で部落に戻るよう、陰ながら助力を吝<sup>おし</sup>まぬであろう。

## 二

その年は、ちょうど交易船を新造する年に当たり、男たちは多忙をきわめていた。部落の漁船は簡単に実用本位に作られていたが、交易用の大船はなお煩瑣な儀式と、さまざまの奇怪な呪術に、舳から艫まで包まれて進水するのが習慣なのである。

すでに海岸には造船用の小屋が立てられ、部落の男たちは近くの森のなかに、適当な檜材を切り出しに入っていた。道具は鉄と石の斧だけで、これで樹を倒し、枝葉を払い、現場で船の各部分に適当な形に仕上げるのである。船首や、船尾の彎曲も、ここで大体の形に刻まれる。呪術上

の理由と、虫食いを防ぐため、船材はすべて切り立ての生木が使われる。初めから贅沢に吟味した樹を使うので、乾燥するにしたがって狂いを生ずる心配もない。

檜の大樹のまわりでは、全裸の男たちが十数人入れかわり立ちかわり斧を揮っていた。二日ばかりで、ようやく幹の三分の一ほどを削りとったにすぎなかった。しかしながらあと二日働けば、巨木は自らの重みで倒れるであろう。その方向を計るのは、一人だけ白衣に身を包み、部族の象徴たる雉子の尾羽をつけて奇怪な面をかぶった祈禱師であった。すでに彼は憑依(ひょうい)の状態となり、彫刻した木杖をふりながら、巨樹の精霊としきりに押し問答をかわしているのである。削りすてる部分が多いので、船材としてはこの四人抱きほどの巨樹だけでも、数本が必要とされた。

予定の日に、とうとう地響き立てて、木が倒れる。男たちは蠅のように八方からとりつき、いそいで大体の形に仕上げる。運搬には百人ちかくを要するが、そのために近くの親類部落からも、屈強な男たちが手伝いに来ているのである。夜の闇に乗じて飛び去ろうとする木の生命力を逃がさぬため、山を越え、森を突きぬけ、どのような事情があろうとも船材はその日のうちに、海岸の造船小屋まで運ばねばならない。

女たちは清めた蓮の葉に、蒸した粟や、稗、山芋や百合根などを盛って、男たちを待っていた。備荒用の椎や栃の実も、香ばしく煎られて竹瓜に盛られていた。蜜で煮た蟻の子や、蝸牛などの珍味も、壺の封印を外されて小量ずつ分配された。激しい、労働の疲労を回復するために、精の

つく食べ物、女たちは本能的に知っているのである。造船に設計図はなく、すべて実物合わせで仕上げてゆくため何度も組み合わせるうちに削りすぎて、また新しい樹を運びこまねばならぬこともある。こう組合せが一通りすむと、つぎに船材をぜんぶ外して、粘り強い桑の木で、船釘を作らねばならない。釘は男の母指の太さと、中指の倍の長さがあり、一船で約三千本が必要とされるのである。

接合部には樹脂をぬり、かぶいも蘿摩綿を詰め、糸をからめた木釘で止める。骨組となる助材はすべて藤蔓で強固に緊縛され、表面を樹脂で固められる。こうして、やがて船首尾が高く反り、両舷に踏板を突き出して縛りつけた、一本の帆柱をもつ船の形ができあがる。五十人の男が乗れ、十六本の櫂で水を掻くときは、速い鳥のように疾走する大船である。

初めて造船の手伝いを許されたスサノオは、誰よりも熱心に、食事の暇も惜しんで働きつづけた。造船にたずさわる男に課せられたさまざまな禁忌も、若者は人が変わったように厳格に守った。たとえば、彼は皮をはいで食う果物、亀や土竜のたぐいを口にできなかった。もし食えば、初めて櫓席についたときに、それらの果実の皮のように手の皮がむけるであろう。あるいは、船の速さが、亀や土竜ほどの遅さに落ちるであろう。

若者の心はすでに、海と山のかなたにある未知の土地に、未知の部族に、未知の恋と戦いの冒険に躍っているのだった。母と姉の部族へ行きたい、というのは、実は彼にとっては一つの口実

にすぎなかったのである。強いて言えば、彼が何らかの牽引を感じているのは、出雲の地は籬ひの川のほとりにあるという、稲を象徴とするある小部落を置いてなかったのである。数年前、その交易隊がおびただしい鉄片を持って、若者の部族をおとずれたことがあった。まったく親類関係にない部族と物品の交換をすることは、祖先の霊も喜び給わぬことであるから、そのときも交易に先立って、二つの部族の代表のあいだに、約婚の式があげられた。すなわち、首長の稚子わぐこのサノオと、向うの交易隊がともなうて来ていた出雲の首長の娘とのあいだに、仮りの約婚儀礼がおこなわれたのである。

娘の名はクシナダといい、そのとき十六歳だったが、すでに満開の桃の花のように美しく思えた。髪は香りの高い花で飾られ、身には珍奇な模様の、極彩色の布をまとっていたが、その下の乳房や臀も十分に隆起を見せており、なめらかな皮膚は薄く緊張して、触れるとひんやりと冷たそうだった。スサノオはたちまち夢中になり、クシナダの方も彼を気に入ったらしく、眼の下をうす赤く染めて、恥ずかしそうに笑ってみせたが、二人ともそれ以上どうするわけにもゆかなかった。約婚は形だけのもので、部族の成人たちには、そのあとの交易と祭の方が重要だったのであるから。

目的をはたして、隊商は籬の川のほとりへ帰って行った。翌年は、もう新たな縁むすびは必要でないで、交易隊はクシナダをともなうてはこなかった。スサノオは勇気をふるって仮りの約